



実証科学と人文学の融合

大平 英樹 (心理学)

先導的人文学・社会科学研究推進事業という研究費を頂き、平成29年10月から「予測的符号化の原理による心性の創発と共有-認知科学・人文学・情報学の統合的研究-」という学際研究プロジェクトを始めました。人文学研究科からは、ドイツ文学の中村靖子先生、美学美術史学の松井裕美先生に研究分担者として協力いただいています。

予測的符号化とは、私たちの脳は、自己と世界のモデルを構成して到来する情報を予測し、その予測と環境からの情報のずれ(予測誤差)を基に知覚経験を能動的に創り出していると主張する神経科学の理論です。この発想は、19世紀ドイツの物理学者であり新カント派の思想家でもあったヘルムホルツの「無意識的推論」の考えに遡ります。予測的符号化は、一般には視覚や聴覚などの知覚現象を対象としますが、感情や信念などの高次な精神機能にも拡張できると考えられています。

このプロジェクトでは、人間の知覚、認知、感情、価値観などの心性が予測的符号化により創発され、それが個人間で共有されることにより「時代精神」のような社会文化的心性が構成される、という仮説を掲げました。この仮説を、認知科学・神経科学の実験研究、コンピュータ・シミュレーションによる社会のモデル化、そして仮説検証的なテキストの読みに基づく人文学的研究により検証しようとしています。ここで威力を発揮すると期待されるのが、文献を統計学や人工知能の技術により解析するテキストマイニングです。

予算は比較的少額で、3年間という短い期間ですが、実証科学と人文学を融合して新しい研究領域を拓くための萌芽的な成果を得たいと思っています。

予算は比較的少額で、3年間という短い期間ですが、実証科学と人文学を融合して新しい研究領域を拓くための萌芽的な成果を得たいと思っています。



分野・専門紹介—File23

日本史学研究室～日本以外にも視野を広げよう～

分野・専門名：日本史学

日本史学研究室は、以前は国史学研究室と呼ばれていました。国史というのは文字通り「わが国の歴史」の意味ですが、日本史となると「世界史のなかの日本史」が見えてきます。

本学の日本史学研究室は古代・中世・近世・近現代の四つの時代に分かれており、私が所属している近世ゼミの院生は、いま日本人一人、中国人一人、韓国人一人、ラトビア人一人です(平成29年度)。この多岐にわたる構成は指導教官の専門(日朝関係史)に関係していることは否定できませんが、グローバル化の時代の縮図と見ることができます。

私は江戸時代(17-19世紀)の東アジア国際関係史(日本・朝鮮・中国三国関係史)を研究しています。私は中国人で、いま日本で勉強していて、今年6月からの一年間は韓国に留学する予定です。研究者にとっ

て研究対象地での長期滞在（留学）と史料調査は不可欠だからです。また、東アジア国際関係史だけを眺めていると東アジアの「一地域史観」に陥りやすいので、一昨年には半年間アメリカのプリンストン大学に留学し、アメリカにおけるアジア史研究と教育の状況を身をもって経験してきました。その後も意識的にアジア以外で生活するアジア研究者との交流を進めています。



(執筆者は前列中央)

私は比較という手法を重要だと考えています。比較を念頭におくことによって、より客観的に自分の研究対象を捉えられるのではないかと思います。日本史学研究室にいらながらも、常に日本以外にも視野を広げることを意識しています。

(程 永超・博士後期課程修了・名大高等研究院 YLC 特任助教)

特別寄稿—File 1

教育としての「移民文学」と名大文学部での6年

井上 美里

「移民文学」という文学ジャンルをご存じですか。移民背景を持った作家によって書かれた作品のことで、母語でない言語が使われていることも多いです。日本では、台湾生まれ日本育ちの温又柔や、ドイツ語作家の多和田葉子が有名です。私は、学部ではフランス文学、修士ではドイツ文学を専攻し、ドイツ語、フランス語で書かれた現代移民文学について研究してきました。アラブ圏にも興味があったので、それぞれ、レバノン人フランス語作家 Amin Maalouf, トルコ系ドイツ人作家 Yadé Kara の作品を取り扱い、アイデンティティや、マイクロ・アグレッション（悪意のない差別的言動）の問題、多文化教育などをテーマに、移民文学が現代社会に与える影響を考えてきました。このような研究をするきっかけの一つが、入学以来続けていた名大の国際教育交流センターでの活動です。学内で国際交流できる場を提供しながら、様々な国からの留学生たちと関わり合う中で、誰もが快適にコミュニケーションがとれる環境や方法とは何なのかを考えてきました。大学院では1年間ドイツに交換留学する機会を頂き、さらに移民文学や多様性社会について学びました。6年間、文学部で自分の専門に拘らず自由に研究をさせてもらったのは本当に恵まれていました。



(執筆者は右列奥から3人目)

文学には人を変える力があります。そしてそれは社会を変えることにも繋がります。移民文学の存在が広まり「複数の言語や文化を持つ」体験を多くの人ができるようになれば、世界はより生きやすくなるのではないかなと思います。大学院修了後、ワーキングホリデー制度を利用してドイツに滞在しています。将来的にはドイツでマイノリティ支援や日独交流に関わる仕事をしたいと思っています。

(フランス文学卒・ドイツ文学博士前期課程修了)

最近の文学部

新しい人文学を目指して。

今、大学の研究に求められるのは領域横断と国際化。名大文学部の教員も数々の新しい試みに挑戦し続けています。大学院をこの春修了し、国外にも活躍の場を求めて旅立たれた二人の先輩のお話を掲載しました。母国語に加えて複数の言語を駆使して活動する時代にすでに入っていることが痛感されます。(YK 記)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)